



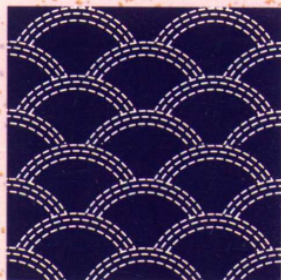
东亚语言研究论丛
EAST ASIA
LANGUAGES STUDIES

陈林俊 著

現代日本語
における文末モダリティ形式の研究

現代日本語 句尾情态形式研究

(日文版)



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS



东亚语言研究论丛
EAST ASIA
LANGUAGES STUDIES

现代日语 句尾情态形式研究

(日文版)

現代日本語
における文末モダリティ形式の研究

陈林俊 著



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

内容提要

本书运用语料库工具和语法化等现代语言学理论,参照与汉语的对比,系统考察了现代日语的情态体系。本书细致描写了日语代表性句尾情态形式在意义层级结构上的分布,分析了其句法特征,探讨了情态形式多义现象的形成机制,并在此基础上梳理了日语情态的意义体系,对日语情态的分类进行了重新思考。

图书在版编目(CIP)数据

现代日语句尾情态形式研究:日文/陈林俊著.

—上海:上海交通大学出版社,2019

ISBN 978-7-313-21464-5

I. ①现… II. ①陈… III. ①日语-语法-研究-日文

IV. ①H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2019)第 133395 号

现代日语句尾情态形式研究(日文版)

著 者:陈林俊

出版发行:上海交通大学出版社

邮政编码:200030

印 刷:江苏凤凰数码印务有限公司

开 本:710mm×1000mm 1/16

字 数:249 千字

版 次:2019 年 7 月第 1 版

书 号:ISBN 978-7-313-21464-5/H

定 价:68.00 元

地 址:上海市番禺路 951 号

电 话:021-64071208

经 销:全国新华书店

印 张:12.75

印 次:2019 年 7 月第 1 次印刷

版权所有 侵权必究

告 读 者:如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系

联系电话:025-83657309

前 言



情态(modality)作为人类语言不可或缺的范畴之一,具有多种表现形式。在日语的情态表达体系中,句尾情态形式发挥着核心作用。有学者基于与汉、英情态动词的对比,认为日语的句尾情态形式丰富多样但意义单一。然而,笔者经语料库检验发现,日语句尾情态形式的意义其实也很复杂,多义现象在日语句尾情态形式中也同样存在。本书围绕情态形式的多义性,选取日语中有代表性的句尾情态形式,借助语料库工具,参照与汉语的对比,从意义层级结构的角度考察了现代日语的情态体系。本书细致描写了代表性句尾情态形式在意义层级结构上的分布,分析了其句法特征,并由此探讨了多义现象的形成机制。本书还通过对句尾情态形式「のだ」的考察,探讨了存在争议的“说明性情态”的定位问题。最后,基于以上对代表性句尾情态形式的意义描写,梳理了日语情态的意义体系,并对日语情态的分类进行了重新思考。

第1章为本书的序章,介绍了本书的研究背景、现有研究中存在的主要问题、本书的研究内容、研究目的、研究方法以及基本结构。

第2章为本书的理论基础部分,阐述了笔者关于情态以及日语情态体系的基本观点,并对句子的意义层级结构以及多义性概念进行了探讨。笔者认为,情态是一个意义范畴,在作为人类语言活动基本单位的句子中,表示说话人对事态的把握以及对听者的态度。情态与命题共同构成了句子的基本意义结构。日语的情态体系可大致分为对事性情态与人际性情态,前者可分为评价性情态与认识性情态,后者与句子的意义类型相关。



本书以现代日语的对事性情态为主要研究对象。在日语情态的诸多表现形式中,「てもいい」「べきだ」「なければならない」「かもしれない」「はずだ」等句尾形式发挥着核心作用。在日语句子中,各意义范畴呈现出层级性结构分布,就情态部分而言,评价性情态、认识性情态与人际性情态由内而外渐次展开。情态形式的多义性来自语言形式的意义扩张,意义扩张的认知机制主要为隐喻与主体化,意义扩张具有单向性。

第3、4、5章为本书的主体部分,分别考察了日语的评价性情态、认识性情态以及句尾情态形式「のだ」。

第3章描写了日语主要评价性句尾情态形式的意义分类,并由此考察了现代日语评价性情态的意义体系。笔者认为,评价性情态主要表达对事态实现的必要性与容许性的评价。本章选取「てもいい」为例,对其意义分布与句法特征进行了考察。研究发现,「てもいい」的意义可从“容许”概念的角度进行梳理,其意义遍布“容许”的多个层面,「てもいい」的意义源于事物内部的主体意愿,主要表达评价性情态,在此基础上派生出了一定程度的认识性情态功能和人际性情态功能。本章还通过与汉语“可以”的对比,检验了「てもいい」的意义特征。最后,本章整体考察了日语的评价性情态,论述了主要句尾情态形式的意义分布与句法特征,梳理了现代日语评价性情态的意义体系。

第4章论述了日语主要认识性情态形式的意义分类,考察了现代日语认识性情态的意义体系。笔者认为,认识性情态是说话人对事态成立的可能性与真实性的判断。根据判断的方式,日语的认识性情态可分为五类:断定、断定保留、盖然性判断、证据性判断,以及放弃断定。本章以「かもしれない」为例,对其意义分类与句法特征进行了描写。研究发现,「かもしれない」可分为:表达对事态实现可能性判断的「かもしれない」₁、仅表示委婉效果的「かもしれない」₂,以及作为表达策略、暂时向对方显示让步的「かもしれない」₃。在多义性方面,认识性情态形式一般可派生出人际性情态,却无法派生出评价性情态。本章还通过与汉语“也许”等译词的对比,从侧面验证了「かもしれない」的意义分布。最后,本章整体考察了日语的认识性情态,论述了主要句尾情态形式的意义分类与句法特征,梳理了现代日语认识性情态的意义体系。

第5章考察了存在争议的句尾形式「のだ」,并由此探讨了所谓的“说明性情态”问题。研究发现,「のだ」具有多种意义,可以分为:表达句内关系的「のだ」_I、表达篇章关系的「のだ」_{II}、表达情态意义的「のだ」_{III}、「のだ」_{IV}。各种意义都共有“P.Q”这一句子结构,「のだ」的情态性意义由该结构派生而来。本章还将「のだ」与汉语“是……的”进行了对比。研究发现:表示“提示内容”的「のだ」_I与表示“提示焦点”的“是……的”₁功能相似,但汉语的“是……的”₁具有清晰的信息焦点标记“是”,而「のだ」_I的焦点位置需借助其他要素进行判定;表示“提示内

容”之外的「のだ」在汉语中无固定译词,需根据语境灵活处理。基于以上研究,笔者认为,「のだ」并非“说明性情态”,日语中也不存在所谓的“说明性情态”,「のだ」的“说明”意义与其他意义一样,都来自「のだ」中潜藏着的“P。Q”结构的“关联”意义。

第6章是本书的结论部分,总结了本书的主要内容,评价了本课题研究的得失,探讨了本书的不足以及今后的研究方向。

目 次



第1章 序章	1
1.1 問題の提起	3
1.2 問題の所在	9
1.3 研究の内容	15
1.4 研究の目的	16
1.5 研究の方法	17
1.6 本書の構成	17
第2章 日本語のモダリティについて	19
2.1 日本におけるモダリティ研究の流れ	21
2.2 日本語のモダリティ体系	23
2.3 日本語におけるモダリティを表す形式	36
2.4 文の意味階層構造とモダリティ形式の意味	43
第3章 評価のモダリティ——「てもいい」を中心に	49
3.1 評価のモダリティについて	51
3.2 「てもいい」の意味分析	59
3.3 「てもいい」に対応する中国語との対照研究	79
3.4 評価のモダリティの体系の再考	91
第4章 認識のモダリティ——「かもしれない」を中 心に	105
4.1 認識のモダリティについて	107
4.2 「かもしれない」の意味分析	110
4.3 「かもしれない」に対応する中国語との対照研究 ..	118



4.4 認識のモダリティの体系の整理	130
第5章 いわゆる「説明のモダリティ」——「のだ」を中心に	137
5.1 「のだ」について	139
5.2 「のだ」の構造と意味	140
5.3 「のだ」に対応する中国語との対照研究	157
5.4 「のだ」の意味分類といわゆる「説明のモダリティ」	165
第6章 終章	167
6.1 本書の結論	169
6.2 今後の研究課題と展望	177
参考文献	179
用例と訳文の出典	185
術語一覧表	188
索引	190
后記	192



序章

第1章

1.1 問題の提起

1.1.1 モダリティの研究

人間は主として言語を通じて、コミュニケーションや思考を行っている。目の前の世界について何かを言い表そうとすると、誰かに聞きたいことがあるとき、自分の感想や気持ちを伝えようとするとき、いずれも言語が欠かせない存在となる。つまり、言語は人間の認知活動の具現化されたもので、人間と世界の間の架け橋とも言えよう。人間の認知の具現化である以上、言語は現実をありのまま伝えるのではなく、常に話し手の現実に対する認識・主観性・判断・捉え方などを帯びることは避けられない。その認識・主観性・判断・捉え方に関連して、「モダリティ」(modality)についての研究が洋の東西を問わず、いままでされてきた。

「モダリティ」とは何か、現在見られる複数の定義づけにはそれぞれ異なる部分があるにもかかわらず、現実(用語としてはほかにも「事態」^①や「命題」といった言い方が見られる)と聞き手に対する話し手の捉え方・判断・主観性などと関わりがあると言う点ではほぼ共通していると言えよう^②。

① 「事態」について、杉村(2009: 35)は「状態」(state)、「過程」(process)、「行為」(action)を含むとしている。

② 例えば、仁田(2009: 3-4)では命題とモダリティについて、以下のように規定している。

「命題(言表事態)」とは、話し手が外界や内面世界－現実－との関わりにおいて描き取ったひとまとまりの事態、文の意味内容のうち客体化・対象化された出来事や事柄を表した部分である。「モダリティ(言表態度)」とは、現実との関わりにおいて、発話時に話し手の立場からした、言表事態-文の対象的な内容-に対する捉え方、および、それらについての話し手の発話・伝達的な態度のあり方を表した部分である。



モダリティの研究は、紀元前4世紀のギリシャ哲学者のアリストテレスの「可能性」と「必然性」の論説にまで遡る。また、カント(2012: 123)は『純粋理性批判』において、カテゴリーの一つとして「様相」を取り上げている。この「可能性-不可能性」「現存在-非存在」と「必然性-偶然性」を扱う「様相」という概念もモダリティと関わりを持つと思われる。

しかし、以上はいずれも哲学や論理学に止まった研究であり、言語の意味研究にはまだ踏み込んでいなかった。モダリティを言語研究に取り入れるようになったのは、20世紀後半以来のことである。その中で、代表的なのはPalmer(1986, 2001)である。

Palmer(2001: 1)は、テンス、アスペクト、モダリティの3者を比較して、テンスは言及された事象や状況の「時」と関係し、アスペクトはその事象や状況の「性質」と関係しているのに対し、モダリティはその事象や状況を表す命題の「ありよう」と関係していると述べている。

モダリティは非常に龐大な体系であり、その下位タイプとして、Palmer(2001)は次のような分類を行なっている(図1-1)。

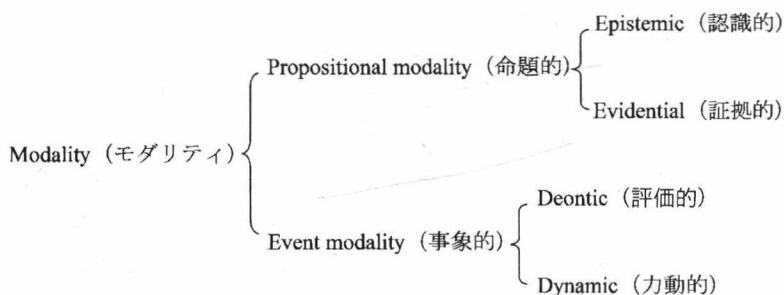


図1-1 Palmer(2001:22)におけるモダリティの分類^①

一つのカテゴリーとして、モダリティはすでに意味的に文の階層的構造に織り込まれている。Nuyts(2005: 20)は、図1-2のようなカテゴリーの配列が各言語に共有されることを指摘している。

図1-2から分かるように、モダリティは、整然と文の構造に組み込まれている。

1.1.2 モダリティを表す形式

さて、話し手の現実(事態・命題)に対する捉え方・判断・主観性などを扱うカ

① 日本語訳は澤田(2006)を参照している。

>evidentiality

>epistemic modality

>deontic modality

>time

>space

>quantificational aspect[frequency]

>qualificational aspect[internal phases]

>(parts of the)STATE OF AFFAIRS

図1-2 Nuyts(2005)におけるカテゴリーの配列

テゴリーとして、モダリティは、具体的にどのような形で現れてくるのか。澤田(2006:5)のまとめによれば、モダリティを表す形式には、(i)法助動詞(modal auxiliaries/modals)、(ii)法形容詞(modal adjectives)、(iii)法副詞(modal adverbs)、(iv)仮定法(もしくは、叙想法)(subjunctive mood)、(v)不変化詞(indeclinables)、(vi)(日本語におけるような)活用、(vii)(日本語におけるような)終助詞などさまざまなものがあるが、こと英語に関する限り、モダリティを最もよく表し得るのは、何といてもmust・may・might・can・could・will・shallといった法助動詞であろう。澤田(2006:7)は以下のような例を挙げている。

- (1) She {may/might/must/should} have missed her train.(可能性)
- (2) This is a terrible party. We really must go home.(義務)
- (3) May I put TV on?(許可)
- (4) Youshall have all your wish for.(約束)
- (5) Ican read Italian, but I can't speak it.(能力)
- (6) I reallywill stop smoking.(意志)

モダリティの表現形式について、Nuyts(2009:16)は英語を例に、以下の表1-1のように整理している。



表1-1 Nuyts(2009)におけるモダリティ形式

	adjectival	adverbial	verbal	auxiliary (like)
evidential	apparent, obvious, clear	seemingly, clearly, apparently, obviously	figure, guess, suppose	seem, appear, must
epistemic	possible, probable, certain, sure	maybe, probably, certainly, surely	think, believe, doubt	may, might, could, will
deontic	fortunate, necessary, advisable	luckily, (un)fortunately, hopefully, better	hope, regret, deplore	may, must, should, can

一方、中国語のモダリティ形式について、賀(1992)^①は七種類にまとめている。

- | | |
|---------------|---------------|
| I イントネーション | II 特殊な文型 |
| III 共起制限 | IV 助動詞及びその否定形 |
| V 語気副詞及びその否定形 | VI 語気助詞 |
| VII 感嘆詞 | |

これに対して、齐(2002: 24)^②は「共起制限」を入れず、六種類に分けている。

- | | |
|------------|----------|
| I イントネーション | II 特定の文型 |
| III 語気詞 | IV 助動詞 |
| V 語気副詞 | VI 感嘆詞 |

中国語では、イントネーションなど非文法的形式を除けば、助動詞、副詞及び語気助詞(いわゆる「語気詞」)などがモダリティにおいて中心的な役割を果たしていると言える。そして、中国語の“能”“应该”“可以”などについては、賀(1992)や齐(2002)のように「助動詞」とする研究が見られる一方、「情態動

① 賀(1992)の原文ではそれぞれ“体现语调的句终标点符号”“特殊的句式”“同现限制,即特定的语气对能与之在句中一同出现的语言成分的选择限制”“助动词,以及可能有的否定形式”“语气副词,以及可能有的否定形式”“语气助词”“叹词”としている。

② 齐(2002)の原文ではそれぞれ“语调”“句式变化”“语气词”“助动词”“语气副词”“叹词”としている。

詞」あるいは「能願動詞」と称する研究^①もある。例えば、彭(2007)は情態動詞を手掛かりに中国語モダリティの体系的考察を展開している。本書においても、「情態動詞」という術語を使うことにする。

日本語では、モダリティを表す形式を整理すると、主に次のような六種類になる。

- I 副詞類: 「かならず」「たぶん」「きっと」「おそらく」等
- II 用言類: 「命令する」「判断する」「推測する」等
- III 助動詞類: 「られる」「たい」等
- IV 文末に来る形式類: 「はずだ」「ことだ」「ものだ」「のだ」「わけだ」「なければならない」「かもしれない」「ざるを得ない」「てもいい」「てはいけない」「だろう」等
- V 終助詞類: 「ね」「よ」「かな」「ぞ」等
- VI 用言の活用形類

英語の整然とした法助動詞群や中国語の情態動詞などに比べると、日本語では、「られる」「たい」など助動詞のほかにも、「べきだ」「はずだ」「のだ」「ことだ」「ものだ」「だろう」「かもしれない」「なければならない」「に違いない」「ざるを得ない」「てもいい」「てはいけない」といった複合的文末形式類が目立つ。表1-2^②はBCCWJコーパス^③で検索したデータである。受身のようなヴォイス的機能も兼ねる助動詞類と豊富な機能を持つ終助詞を除けば、モダリティを表す形式の中で一番よく使われているのはやはり上述した文末形式である。

表1-2 BCCWJにおける各形式の出現数

形式	出現数
必ず/かならず	13622/1313
多分/たぶん	3613/4482
恐らく/おそらく	1663/6183

① 前者を使った研究には王(2000)・彭(2007)・李(2008)・楊(2014)などがあるのに対して、後者を用いた研究には馬(1988)・王(2003)・賴(2006)などが挙げられる。

② 当表で使われる使用頻度数は、当該形式をBCCWJで文字列として検索したデータによって整理したものである。各形式をそのまま入力して検索したので、「かならず」といった活用のない副詞はほぼ漏れがないと言えるが、「はずだ」のような文末形式の否定・過去など活用形を考えると、実際の使用数がより多くあると考えられる。

③ 本書においては、国立国語研究所が開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(中納言)のことをBCCWJと略している。



(続表)

形式	出現数
きっと	7678
はずだ/はずです/はずだった/はずでした	6635/4165/981/51
てもいい/てもよい/てもよかった	7727/2388/298
かもしれない/かもしれません	20405/10722
なければならない/なければなりません	22410/3104
のだ	99326 ^①

これについて、仁田(2009: 5)は以下のように指摘している。

モダリティは、まずもって、文の意味構造のある位置・ある箇所にある。文の意味構造にその在りかを持つモダリティは、その中心が、語彙的要素——例えば、「ぜひ」「たぶん」——としてではなく、述語の形態的あり方として表現されることによって、意味・文法的カテゴリーとして立ち現れてくる。

日本語には助動詞も数多くあるにもかかわらず、実際には、むしろこの一連の文末形式のほうが、より頻繁に使われていて、英語の法助動詞群などに対応する場合が多い。澤田(2006: 12)の例を借りて説明する。

(7) The picture to the left of the fireplace must be a Chagall.

(8) a. 暖炉の左に絵を飾るとすれば、シャガールでなければならない。

(=シャガールしか飾ってはならない)

b. 暖炉の左に飾ってある絵はシャガールに違いない。

(=きっとシャガールだ)

英語ではmustのような法助動詞によって表されることは、日本語で言うと、「なければならない」や「に違いない」といった文末形式になることが多い。つまり、英語では法助動詞などで済ませる表現は、日本語で表されると、常に複雑な文末形式になってしまうのである。英語だけでなく、中国語の場合を見ても、似たような現象が見られる。

① これは「のだ」(119171)の検索数から「ものだ」(19845)の検索数を引いた後の数であるが、ほかにも「のです」「のである」「んだ」「んです」などバリエーションがまだ計上されていないため、実際数はより多くあるはずである。

(9) 但是那愿望还必须以开玩笑式的语气表达,以便需要时可以声明“我不过是开开玩笑”。(史铁生《插队的故事》)

訳: しかしその願望は必ず冗談めいた調子で表現しなければならなかった。必要な時に「ほんの冗談だよ」と言い訳するためである^①。

(10) 也许,是在火车上,第一次见面,听了他那些让人笑破肚皮的谈话之后?
(陈建功《丹凤眼》)

訳: ひょっとすると汽車の中で初めて会って、おなかの皮が破れそうになるほどおかしいおしゃべりを聞いたときからかもしれない。

例(9)と例(10)では、中国語の“必須”と“也许”は、日本語に訳されると、いずれも「なければならない」「かもしれない」のような文末形式になる。

以上で分かるように、日本語では、文末形式のほうこそモダリティ機能を担う主役であり、最も研究を要するのではないか。本書では、このような日本語の文末におかれる、モダリティの意味を表す複合的文法形式を通じて、日本語モダリティの体系的把握を試みる。

1.2 問題の所在

1.2.1 モダリティ形式の位置づけの曖昧さ

1990年代以来、日本語のモダリティ研究が盛んに行われてきた。「のだ」「べきだ」「はずだ」「ことだ」「ものだ」「だろう」「かもしれない」「なければならない」「に違いない」「ざるを得ない」「てもいい」「てはいけない」といった文末形式はそれぞれ具体的モダリティ表現として研究されてきたが、品詞としての位置づけはまちまちで、まだ定論が見られないままである。

上述したモダリティ形式について、「複合辞」として研究を進めてきたアプローチ(松木1990、2009)もあれば、また単なる「助動詞」として扱った研究(寺村1984)もある。さらに、明確な位置づけを避けて、ただ「形式群」としてまとめた研究(森山2000)も見られる。このような文末に来るモダリティ形式の位置づけが曖昧であることは、関係する分野の研究にも影響を及ぼしている。たとえば、こうした背景の下で、「助動詞」について、『新版日本語教育事典』(松本正恵2005:93)は以下のように述べている。

従来、学校文法では、現代語の助動詞を次のように意味のうえから分類することが多い。使役(せる・させる)、受身・可能・自発・尊敬(れる・られる)、希望(た

① 訳文は原文と同じくCJC 中日対訳コーパスから抽出したもので、特に説明がない限り、本書で使われる訳文はCJC 中日対訳コーパスによるものである。